

九月九日の国語の時間の時です。先生が、

「国語辞典を持っている人。」

と聞かれました。すると、裕幸君と、やよいちゃんのふたりが手を上げました。あいつたちいいなあと思いました。みんなも二人をジロジロ見ました。

次の日、とがり君と修一君が買って来ました。ぼくは、

「おし、どこで買って来ただ。何円だった。」

と、とがり君に聞きました。とがり君は、

「さんこうどうで買って来た。二八〇円だ。」

といいました。ぼくもほしくてたまりません。家へ帰ったら、おかあさんにたのんで買ってもらおうと思いました。ぼくは少しいじらせてもらいました。

夜、とうちゃんが帰ってくるのがおそかったので、かあちゃんにぬい物をしてまっています。その時

「おえ、国語辞典を買ってくれ。」

とねだりました。かあちゃんはぬい物をぬいながら、ぼくの方をちよつと見て

「とうちゃんに買ってもらえ。」

といいました。ぼくはとうちゃんなん、そうぼくのほしいもん買ってくれやしんもん、かあちゃんが買ってくれやいいじゃんと思いました。だけど、だまって、ひとりでドタドタとひこう

きを家の中でとばして、とうちゃんが西尾のしごとから帰って来るのをまっています。

父ちゃんはじきに帰って来ました。すぐ上にあがって、おかあさんとしごとのことを話していました。ぼくは、

「とうちゃん、みんな国語辞典をもっておるで買ってくれ。」

といいました。ほんとはみんなもつとやしんけど、そういわな買ってくれやしんので、うそをいいました。すると、とうちゃんは、そんなことしらなので、

「みんながもつとるなら買ってやらあ。」

と、しょうがないなあというようにいいながら、かばんの中のさいふから、ぼくに三百円くれました。ぼくはもうけちゃったと思いました。みんながもっているあつい赤い色の辞典が買ってもらえるのでうれしくて、とんでぼくのさいふのある本たての所に行きました。とうちゃんはこのこしながら、

「国語辞典を買ったら勉強をよくせおよ。」

といわれました。かあちゃんも、

「いいなあ太、よう勉強せなあかんよ。」

といわれました。ぼくもにこにこして、

「うん。」

といいました。そして、お金をさいふの中にそつと入れ、パチンとしっかりしめました。

次の日の朝、ぼくはとくべつ早く、いつもより一時間前の五時半におきました。学校に行く時、さいふの中から出して、さんこうどうへ行きました。

「国語辞典くれ。」

といって、はいつていったら、先生がれの女の人が、

「三百三十円のはあるけど、二百八十円のは売り切れだがね。」
といわれました。ぼくはたりないなあと思いましたが、しょうがねえので買わずに学校へ行きました。国語の時間がたいへんたるかったです。

その夜、とうちゃんがしごとから帰って来るとすぐに、

「とうちゃん、さんこうどうは売り切れただけで西尾で買って来てくれ。」

といいました。「あかん。」といわれたらどうせかしらんと思っていたら、とうちゃんはめんどうくさそうに、

「しょうがねえ。買って来てやらあ。」

といやいやにいわれました。ああよかったと思いました。

あくる日の朝、ぼくはとうちゃんが来るのをちゃんばらのまねをしながら、早く帰ってこんななあとまっていました。八時ごろ、ポコポコの音がピーピーとしたので、

「とうちゃんが来たあ。」

と、走って外へ行ってみると、とうちゃんでした。ポコポコのうしろには、とりかごが三つつつんでありました。そのかごの一つの中に四かくいつつんだものがあつたので、買って来てくれたんだと思つて、

「とうちゃん、早よ国語辞典をおくれ。」

と、いいました。とうちゃんはとりかごをおろしながら

「おお、買って来たぞ。かばんの中にあるぞ。」

といつて、かばんを出してくれました。ぼくはそれをかかえて、家の中へもつていつてあけてみました。ところが、中からは「国

語の研究」という本が出て来ました。こんなちがう、とうちゃんなんパーだなあと思いました。

「とうちゃん、こや国語の研究というやつじゃねえか。」
といつたら、

「ほだ。ぼうが四年の本を買つてこいといつたのでそいつを買つて来ただ。」

といわれました。ぼくはおこつて

「あんなちがうじゃん。あした小学校の国語辞典を買つて来てくれ。」

といいました。すると、たばこをポーとふいて、

「それが本屋の人がいいといつたぞ。だからがまんしておけ。」

と、とうちゃんはおこつたようなかおでいわれました。ぼくは、「みんなは二百八十円のあつい赤い本をもつてるぞ、やだ。」
といつてねだりました。とうちゃんはこまつたように、

「まあしょうがねえ。買ってきてやらあ。」

といわれました。

「ふんどに買って来てくれるかえ。」

と、ねんをおすと、

「そや、買って来てやる。」

と、ニヤツとわらつていわれました。ぼくはうれしくなつて、かつてばにいろかあちゃんに、

「買ってくるぜ。」

といいました。かあちゃんは

「今度はまちがえんようにたのんでおけよ。」

といわれました。僕はとうちゃんのせなかにおぶさって、

「こんどはまちがえちゃあかんぜ。二百八十円の国語辞典だぜ。」

と、たのみました。

「うん、うん」

と、新聞を見ていました。

次の日の学校へ行く時、こうちゃんをよびに二けんへだっている家のところを通ったら、とうちゃんがとりを買っていたので、ぼくは、

「本を買って来てくれ。わすれちゃいかんぜ。」

と、またたのみました。それから、こうちゃんをよんで学校へ行く時、武司君の家の方へ行く道とわかれるところまで来たら、とうちゃんがまたいたので、

「本をわすれちゃあかんぜ。」

と、行って行きました。

夕方、そろばんの帰りに、ぼくたちの村へはいるところで、帰って来るとうちゃんにいきあったので、ぼくは、

「本買って来たかえ。」

と、ききました。とうちゃんは、

「おう。」

と、ポコポコでファンファンと走って行きました。ぼくは、またまちがえているとこまるなあと思って、自転車をぐんぐんふんで家へ帰り、すぐ、

「とうちゃんどこにおるだえ。」

と、大きな声でききました。とうちゃんは、

「すぐそこにおいてある。」

と、かごをおろしながらいわれました。本は上がりはなにおいてありました。あけてみると、あつい国語辞典がありました。ぼくは、あしたからこいつを学校へ持って行ってわからないことばをみんなしらべちゃうぞと考えながら、台所にねころんで見ました。

※当時の表記をそのまま掲載しています。